

巻頭言

〈小特集〉

立命館大学間文化現象学研究センター／
 東京大学共生のための国際哲学研究センター
 共同主催シンポジウム
 「ひとはいかにして思考するのか？
 ——バタイユ、ブランショ、ナンシー」

Research Center for Intercultural Phenomenology,
 Ritsumeikan University / The University of Tokyo Center for
 Philosophy Joint Symposium
 How do people think? Bataille, Blanchot, Nancy

本特集は2021年3月27日に立命館大学衣笠キャンパスで行われた、立命館大学間文化現象学研究センター、および東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）による共同主催シンポジウム「ひとはいかにして思考するのか？——バタイユ、ブランショ、ナンシー」で発表された論考を集めたものである。

高度情報化社会の到来やテクノロジーの進展によって、人類は益々「自ら思考する」という営みを反省的に振り返る機会を失いつつあるように思われる。また、日頃情報の洪水の中でのみ込まれ、「検索さえすればよい」、「インフルエンサーが語っていることが正しい」という言説に影響を受けてしまっている人々も少なくない。こうした現代社会の状況の中で、改めて人間の「思考」の在り様についてラディカルに問い直す本シンポジウムを開催する意義は、決して小さくないものであるように思われる。

本シンポジウムでは、バタイユ研究、ブランショ研究、ナンシー研究をそれぞれ牽引される研究者、横田祐美子氏（立命館大学）、高山花子氏（東京大学）、伊藤潤一郎氏（立命館大学）の三名を招き、「ひとはいかにして思考

をするのか」というテーマについて、それぞれご専門にされている思想家・哲学者の観点から論じていただいた。

横田氏は、バタイユの議論に立脚しつつ、未知なる事柄を既知なる事柄へと回収してしまう「推論的思考 (la pensée discursive)」を越えて思考するための「非 - 知」の概念について論じられた。バタイユによると、非 - 知とは、既存の世界観や思考の常識を支えてしまっていた同一性や同質性に揺さぶりをかけるための思考の様態なのである。

高山氏は、ブランショの議論に立脚しつつ、首尾一貫した世界観に亀裂を与え、これまで想像もされなかったような新たな思考の可能性を現出させる言語の様態としての「ディスクール」について論じられた。論理的一貫性に閉じた思考の円環自体に批判を投げかけ、そこから新たな知の力動性を生み出す言語の様態としてブランショが指摘するのが、「ディスクール」という言葉の在り方なのである。

伊藤氏は、ナンシーの議論に立脚しつつ、思考とリズムの根本的な関係性について論じられた。ナンシーによれば、眠ったり、ぼうっとすることによって思考のリズムを維持することが重要であると同時に、特異性（己自身によっても所有されないような内部）と関連する仕方で思考についての探究を行っていくべきなのである。

コロナ禍が続き、対面のイベントが実施できない最中でのオンライン・イベントの開催となったが、当日は常に150名以上の方々が視聴をしてくださった。これもひとえに立命館大学のスタッフの方々と講演者の方々（横田祐美子氏、高山花子氏、伊藤潤一郎氏）、そして活発に議論に加わった質問者の方々のおかげである。とりわけ、横田氏は講演者として準備をしてくださったのみならず、本シンポジウムの開催に向けて、二つの大学間を繋ぐ役割を担ってくださった。横田氏の協力がなければ、本シンポジウムが実現することはなかっただろう。改めて、この場を借りて感謝申し上げる。